

『改訂再版 若柴ことば』

まえがき

若柴で使われていた言葉、今でも使われているであろう私たちが育った言葉、私は今でも使っている若柴の言葉は、私にとっては意思伝達の重要な役割りをしている。古いなどと言われながらやめられない。懐かしい温もりが籠っているからだ。若柴の言葉と離れたくない。

ラジオやテレビの普及発達、新住民の増加などによって共通語が多く使われてきた。学校教育の力もある。大いに結構なことであるが、反面いわゆる方言すなわち若柴の言葉が消えつつあることは何となく寂しい気持ちである。

そんな気持ちから若柴ではどんな言葉が使われていたか、自分はどんな言葉を使って育ったか集めてみようという気になり、おぼろな記憶を辿りながら作り上げたのが若柴言葉の一冊である。欲しいと言う人があって分けてあげたので無くなってしまったし、不十分の点もあったので再版を決心したわけである。

若柴は水戸街道の宿場だったので、諸国の人々が往来したり宿泊したりするので、他国の人達に接触することが多かった関係で方言は少ないようである。

方言すなわち若柴の言葉の特長はイとエの混同というか、判別がつかないというか、これが一番であると思う。これは若柴ばかりでなく利根川以北の広い範囲にわたるようである。それから清音を濁音に発音すること、例えば“字を書く”のカクは「カグ」と発音する。「グ」は完全に濁らず半分くらい濁るのである。利根川を越えるとイとエの区別がつくし、濁りも少ないようである。房州生まれの人と付き合ったことがあるが、イの音が完全ではなかった。利根川以北でキシチニ…を長く発音すると母音が出るがその時のイに近い音である。

中学校の入学試験の時、身体検査で色神のところへ来た。イと読める形なので一生懸命「イ」と言ったら「イ、イ」と直された。そのイが千葉のイに似ている。変な、腹立たしいような気持ちになった記憶がある。後でわかったのだが、その先生は図画の宮内陽三先生だった。口のせい、耳のせいだったのか。それとも先生は房州ご出身だったのかも知れない。

日本の言葉（共通語）を書いて表す基礎となる字の50音表という便利なものがある。その中に二重に発音する字がある。ハ、ヘは当用漢字制度が実施される時、50音も一緒に整理されたが残った。前後の関係でワ、エと発音する。ガ、ギ、グ、ゲ、ゴも残った、残すしかないのだ。鼻濁音といって鼻からも同時に息を出しながら発音するのだ。字に書いてわからないので、鼻濁音はこの冊子の記述に限って次の例のようにアンダーラインをつけることにする。ガ

50音表の字を組み合わせれば日本語が表現できる仕組みになっているはずだが、地方の言葉になると50音表にない音が混じってくるので苦労する。

そこで次のような工夫をしてみた。それでも完全とは行かない。

若柴言葉はカタカナで書き表す。例えば、ナイ（無い）、ナエ（苗）をネエ、ハイ（灰）、ハエ（蠅）をヘエ、マイ（枚）、マエ（前）をメエに、それぞれ訛る時、アンダーラインした字のとおりに発音しない。訛った時のエは少し口を広くしてアに近い音になる。これはいわゆる田舎の言葉で、若柴言葉の特長である。便利な50音にも無い。英語にはこれに近い音がある。この音はひらがなで表すことにする。ネえ、へえ、メえ、等のように。解説の欄であるべき姿の言葉の時はアンダーラインして表す。

ユの音も難しい。若柴で話すユの音も50音表には無い。ユの音は千葉のイの音に似ている。ユ、リの拗音も難しい。チュウ、リュウをチイ、ユウなどと発音する。リの音のできない人もある。

声を出すのには喉の声帯がおおもとであるが、その声帯も部分によって受け持つ音があるのだということだ。その声帯の発育が自然環境や人為的環境によって違いができると発音も変わるのだそうだが、それで濁音の多い地方もできるし、清音が多くきれいに聞こえる言葉の地方もあるのだそうである。声を出す時に低い声と高い声では低い声の方が濁りやすそうだ。若柴は濁音が多い。これが無くなれば若柴言葉もそんなに悪くはないと思う。

もう一つの訛に東国訛というのがある。関東以北広くなので東国というのだが、母音のウとオが入れ替わっているものである。古くは防人（サキモリ）の時代からあるものでサキモリをサキムリといっているものである。万葉集の4364の歌にある。

佐伎牟理尔 多々牟佐和伎尔 伊敝能伊牟何
さきむりに たたむさわぎに いへのいむに 　　　　　　　いむ＝妹（イモ）
　　　　　　　奈流敝伎己等乎 伊波須伎奴可母
　　　　　　　なるべきことも いはずきぬかも
茨城（ウマラキ）郡の若舎人部（ワカトネリベノ）廣足（ヒロタリ）

共通語が普及しても「言葉は国の手形」とやらで「若柴の者だ」ということが分かるような「若柴言葉」を少しでも残したいものである。

平成6年春 弥生3月

野口 治男

言葉は生きているというけれど

言葉は生きているという。どんなことでしょうか。生きているから変わるということか。

①言いにくいから自然に変わるのか。

②古くから話されていて飽きたから新しい言葉にしようというのか。

③いい言葉だからいつまでも使っていようというのか。

どれももっともだと思う。

①急いで言う時に発音しにくく並んだ時は、変えざるを得ない。文語から口語になった時がそうではなかろうか。自然発生的なものを整理して決めたのだけれども。例えば、書いて=書いて、聞きて=聞いて、食いて=食って、飛びて=飛んで、向かわん=向かおう…等となる。前後が結びついて拗音になったり、音の前や後に接頭語・接尾語として付いたり、中間に入ったりする。中間の例、桃(モモ)=モンモ、糰(モチ)=モッチ、セミ(蝉)=センミなどがある。また、音便といって別の音になることもある。

②飽きたからとて濫りに変えるのは良くないことである。言葉は万人のものだから。例えば、'ら' 抜きで '食べられます' を '食べれます' などというようなもの、言葉によってはとんでもないことになるものがある。外国の言葉をカタカナで短くして混ぜ込む。国も構わず、英語やフランス語だのドイツ語スペイン語だのと、むやみやたらに並べて喜んでいるのはどうかと思う。新聞を読んでも解らない。

③の考えに賛成である。日本の良い言葉を、美しい言葉を、なお一層美しくして長生きさせたいものである。

何はともあれ若柴言葉を50音順に分類して並べてみよう。